

南蛮渡来のポルトガル医療が、 江戸時代の医学に与えた影響について

葉山美知子

鎌倉早見美容芸術専門学校

江戸時代以降に舶来したオランダ西洋医学の歴史や変遷については、既に多くの研究がなされている。一方、それ以前16世紀後半に南蛮から渡来したポルトガル医療に関する歴史的評価は如何であろうか。日本に西洋医学をもたらしたのは、16世紀半ばに来航したポルトガル(葡と略す)のイエズス会士・キリシタンであり、布教の一環として葡医療が各地に浸透した。しかし、イエズス会の医療行為禁令(1558年)と日本が鎖国政策でポルトガル人を来航禁止(1639年)したためにポルトガル医学は歴史に埋もれてしまった。しかし、筆者は彼らの伝道を通じて葡医療が近世江戸医学に多大な影響を与え、オランダ医学の先駆的役割を果たしたものと考え、そこで以下の文献資料と、当時の南蛮風俗と生活光景を如実に描写している「南蛮屏風」を視覚資料として検証(南蛮屏風は口演で)する。

文献資料：①『イエズス会士・日本通信』上・下(村上直次郎訳・雄松堂書店 1968)、②『イエズス会士・日本年報』上・下(村上直次郎訳・雄松堂書店 1969)、③『フロイス 日本史』全12巻(ルイスフロイス著、松田毅一訳・中央公論社 1977)、④『邦訳・日葡辞書』1603年版(土井忠生編訳・岩波書店 1980)、⑤『長崎市史・通交貿易編西洋諸国部』(長崎市役所編・清文堂 1967年刊)

①②⑤の資料で葡医療関連用語(和訳)をI. 外科・内科・精神的疾患名 II. 医薬品・治療用食品名に分け多少説明を加えて以下に数例記す。

- I. ○盲人、癩患者、啞者、熱病あり(1555) ○負傷と腫物を治療、15日で全快(1553) ○戦いで銃傷を負った武士の体内に残った銃丸を抜き取り約15日で完治(1562)……以上①_上。
○拇指腫脹激痛のため指の薬で治療(1556) ○視力を奪われ眼は殻に被われた様(1578)……以上①_下。
○中風のため知覚なく突然死(1587) ○葡貿易商と平戸町人の刀傷殺傷沙汰(1561)……⑤ なお、④の詳細は学会口演で述べる。
- II. ○ミサ用葡萄酒(1557) ○珍品の乾燥大根葉と南瓜葉(1557)……①_上 ○甚だ甘い薬剤に金を塗らる丸薬3粒(1566) ○携帯用各種薬品(1566) ○慈恵の実と新しい植物(1568) ○悪寒用サントメの木の水(1569)……以上①_下。 ○病者用ポルトガルの油「(1559)……⑤

以上I. II.の記載例はイエズス会士の布教活動に際する医療関連の報告である。そこで日葡双方の観点から南蛮船で渡来するイエズス会士と葡貿易商たちが如何に布教と医療に関わったかを考察した。

医療に関して、そもそも南蛮船は長期の航海に備えて医師の乗船は欠かせない。また西洋や支那の医薬品は、南蛮の香辛料や食品と共に交易の重要品目であった。「南蛮屏風」にも港界限の光景にそれと覚しい積荷の梱包や大壺・ギヤマン瓶が所狭しと描かれている。

布教の面では、イエズス会士は魂の救済に加えて肉体的治療を施す(療養院や癩病棟の設置)ことで信徒を取り込み布教の拡大をはかった。これは医療禁止の決定後も上記の事例に示した如く秘かに連綿と行われている。確かに従来の日本医方や支那漢方に比して、この西洋ポルトガルの新鮮な医学知識と科学的な医療技術行為に人々は驚嘆した。そして安土桃山という南蛮時代の開拓者精神として人々に記憶された。その意識が鎖国後の江戸時代に舶来したオランダ医学の受け入れと発展に少なからず影響を与えたといえるのではないだろうか。